

連載「つたえること・つたわるもの」№169

おとなのなかの〈子どもの宇宙〉、

「あいうえお」でつむぐ〈ひらがな〉詩。

出版ジャーナリスト 原山建郎

来週（10月2日）、『日本語の〈たまご〉——「いろはうた」と「あいうえおうた」いま、〈ひらがな〉詩がおもしろい！』と題する「子育て講座」（東京都・下里しおん保育園）を行う。この講座には、★日本語の〈たまご〉としての「あいうえお」を介して、おとなのなかの〈子どもの宇宙〉に出会う／☆「あいうえおうた」の音読演習によって〈ヒーリング・リーディング（ライティング）〉をめざす、この二つの目標がある。

一つ目の目標である★「おとなの中の〈子どもの宇宙〉」といえば、本コラム№115（子どもの文学は「めでたしめでたし」で終わる物語。）でとり上げた『子どもの宇宙』（河合隼夫著、岩波新書、1987年）から、かつて「子ども」であった私たち、いまの「おとな」が忘れつつある〈子どもの宇宙〉の一文を再掲する。

子どものなかの宇宙

この宇宙のなかに子どもたちがいる。これは誰でも知っている。しかし、ひとりひとりの子どものなかに宇宙があることを、誰もが知っているだろうか。それは無限の広がりや深さをもって存在している。大人たちは、子どもの姿の小ささに惑わされて、ついその広大な宇宙の存在を忘れてしまう。大人たちは小さい子どもを早く大きくしようと焦るあまり、子どもたちのなかにある広大な宇宙を歪曲してしまったり、回復困難なほどに破壊したりする。このような恐ろしいことは、しばしば大人たちの自称する「教育」や「指導」や「善意」という名のもとになされるので、余計にたまらない感じを与える。

私はふと、おとなになるということは、子どもたちのもつこのような素晴らしい宇宙の存在を、少しずつ忘れ去ってゆく過程なのかなときえ思う。それでは、あまりにもつまらないのではなからうか。

『子どもの宇宙』「はじめに」1ページ

私たちが母親の子宮で過ごしていた胎児の時代、母親が話すことばは、ひらがな（うれしいね、おやすみ、など「あいうえお」の響き・母親の発音体感）として伝わってきた。

もし、それが漢字やアルファベットであったとしても、受胎5か月後に完成するという胎児の聴覚には、やわらかくまあるい〈ひらがな（カタカナ）〉として響く。これらの胎内記憶は、やがてこの世に赤ん坊として生まれ出て、長じてわが子の父母となった私たち「おとな」の潜在意識の中に、あの懐かしい（胎内記憶）が、いまもひっそり棲息している。

今回のテーマに掲げた『日本語の〈たまご〉——「いろはうた」と「あいうえおうた」——いま、〈ひらがな〉詩がおもしろい！』にもあるように、「いろは（10世紀・平安時代に七五調の今様として成立し、のちに「いろは順」の手習い手本となった）うた」と「あいうえお（15世紀・室町時代後期の国語辞典『温故知新新書』に載る→明治時代の教科書はひらがなの「あいうえお順」になった）うた」こそが「日本語の〈たまご〉」であり、やわらかくまあるい〈ひらがな（カタカナ）〉詩を音読することで、胎児の時代に耳にした母親の「あいうえお」の発音体感を介して、懐かしい〈胎内記憶〉を呼び覚ますための、貴重な手がかりになる。

このことは、一つ目の目標、★「おとなのなかの〈子どもの宇宙〉」のヒントとなる「母親の胎内にいたときの記憶・胎内の記憶を持つ子ども・大人が持つ胎内記憶・胎内記憶から何を聞くか」について書かれた『胎内記憶』（七田眞・つなぶちようじ共著、ダイヤモンド社、1998年）にも書かれている。

そして、二つ目の目標である☆〈ヒーリング・リーディング（ライティング）〉については、「自分史を書くことでわかるかけがえのない自分・ヒーリング・ライティングで自分史を書く」につ

いて書かれた『あなた自身のストーリーを書く』（つなぶちようじ著、主婦の友社、2002年）が、大きな手がかりになった。

つなぶちは、「自分史（自分の過去についての文章）を書く」ことを通して、自分のこと（本当の自分）を深く発見し、それが自分の心の声を聞くことにつながるとして、〈ヒーリング・ライティング～自分史を書く〉プログラムにおける「4つの目的」を挙げている。

- 1、 いままで自分が歩んできた道をふり返し、これからの人生の意味を考え直す。
 - 2、 いままで自分が歩んできた道をふり返ることで、現在の自分がトラウマのように隠し、見ようとしない事実と直面する。そしてそれを書くことで心にためた隠した思いを表現し、そのことから自由になる。
 - 3、 自分のそれまでの人生に意味を与えることで、豊かな人生を歩んできたことを再確認する。
 - 4、 現在感じる未来について、自分なりの展望を与える。
- （『あなた自身のストーリーを書く』48ページ）

今回の講座では、つなぶちが提唱する〈ヒーリング・ライティング（自分史を書くことで癒される）〉を、「声を出してひらがな絵本を読む（リーディング）」演習は、読み手の心の中に「よみがえる幼少期の記憶を、ひらがなという文字に書き記す（ライティング）」ことであるという原山流の視点で、〈ヒーリング・リーディング（懐かしい幼少期のひらがな絵本を声に出して読むことは、楽しかった幼少期の〈子どもの宇宙〉を再体験しながら癒される）〉と読み替えて、「あいうえおうた」を講座の参加者全員で音読する予定である。

子育て講座で音読する「あいうえおうた」の一部を、簡単な著者説明とともに紹介しよう。
※日本では作家の没後 50 年以前は著作権が発生し、詩の引用についてのハードルが高いため、没後 81 年の北原白秋（※作家の敬称は省略。

以下同じ）を除く詩人、作家の「あいうえお」詩は、念のため、子育て講座（演習）で音読する詩の出典（書誌情報）は明示するが、その詩（作品）の全文ではなく、前半のみ紹介。作品中の「/」マークは改行、「//」マークは1行空き、または改ページを表す。

☆北原白秋の「五十音」（白秋童謡集の第五集『祭の笛』収録、アルス、1922年）

「ゆりかごのうた」（ゆりかごの歌を かなりやがうたうよ、……）、「あめふり」（あめあめ ふれふれ かあさんが……）などでおなじみの、詩人で童謡作家の北原白秋（1885～1942年）は、「五十音」（通称「あめんぼの歌」）を作詞した目的を、「これは単に語呂を合せるつもりで試みたのではない、各行の音の本質そのものを子供におのづと歌ひ乍（なが）らにおぼえさしたいがためである。」と述べている。

「五十音」

水馬赤いな。ア、イ、ウ、エ、オ。（あめんぼあかいな アイウエオ）／浮藻に小蝦もおよいでる。（うきもに こえびも およいでる）／柿の木、栗の木。カ、キ、ク、ケ、コ。（かきのき くりのき カキクケコ）／啄木鳥こつこつ、枯れけやき。（きつつき こつこつ かれけやき）／大角豆に醋をかけ、サ、シ、ス、セ、ソ。（ささげに すをかけ サシスセソ）／その魚浅瀬で刺しました。（そのうを あさせで 刺しました）／立ちましよ、喇叭で、タ、チ、ツ、テ、ト。（たちましよ ラッパで タチツテト）／トテトテタツタと飛び立った。（トテトテタツタと とびたつた）／蛞蝓のろのろ、ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ。（なめくじ のろのろ ナニヌネノ）／納戸にぬめって、なにねばる。（なんどに ぬめって なにねばる）／鳩ぽつぽ ぽろぽろ。ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ。（はとぽつぽ ぽろぽろ ハヒフヘホ）／日向のお部屋にや笛を吹く。（ひなたのおへやにや ふえをふく）／蝸牛、螺旋巻、マ、ミ、ム、メ、モ。（まむまむ ねぢま

き マミムメモ) / 梅の実落ちても見もしまい。(うめのみ おちても みもしまい) / 焼栗 ゆで栗。ヤ、イ、ユ、エ、ヨ。
 (やきぐり ゆでぐり ヤイユエヨ) / 山田に燈の点く宵(よひ)の家(いへ)。(やまだに ひのつく よひのいへ) / 雷鳥は寒かる、ラ、リ、ル、レ、ロ。(らいてうは さむかる ラリルレロ) / 蓮花が咲いたら、瑠璃の鳥。(れんげが さいたら りのとり) / わいわい、わっしよい。ワ、ヰ、ウ、エ、ヲ。(わいわい わっしよい ワヰウエヲ) / 植木(うゑき)屋、井戸(ゐど)換へ、お祭りだ。(うゑきや ゐどがへ おまつりだ)

(※作品の青字部分は旧仮名遣い。カッコ内ひらがな部分も旧仮名遣いだが、ッ、っ、やは小文字)

★浜田廣介の『あいうえおのほん』(いわさきちひろ絵、のら書店、2004年)

童話作家・濱田廣介(1893~1973年)の『ひろすけ絵本』(偕成社、1965~1966年)には、懐かしい「ないたあかおに」や「りゅうのめになみだ」が収められている。リズムカルな「あいうえおのほん」。

「あいうえおのほん」

あさ/めがさめた/あおい/そら//いい/てんき/すすめが/なくよ//うめの/きの/あおい み/ひとつ//えだから/とれて/ぼろりこ/ぼろん//おちたよ/どこに/おにわの いけに//かえりが/おそい/きつねの こ/ひが くれた/つきが だた/きつねの かあさん/あなを/でた//くらい/はやしの/ほそい/みち/かあさんきつねが/よんで/いる//けろ けろ/かえるが/なく たんぼ/こぎつね どこよと/よんで/いる//こん こん/ここよと/きつねの こ/こたえて/とこ とこ/かけてくる …… (さ行以下は割愛)

★中川ひろたかの『あいうえおのうた』(村上康成絵、童心社、1975年)

「ピーマン村の絵本たち」シリーズの『おおきくなるっていうことは』『さつまのおいも』(村上康成絵、童心社、1999/1995年)などがある、日本で初めての保育士(昔は保父と呼ばれていた)であり、絵本作家でシンガーソングライターでもある、中川ひろたか(1965年~)が書いた「あいうえおのうた」。

「あいうえおのうた」

あやとり いすとり あいうえお / かきのみくわのみ かきくけこ / さんかく しかく さしすせそ / たこいと つりいと たちつてと / なのはな ののはな なにぬねの…… (は行以下は割愛)

★まど・みちおの「あいうえお(がぎぐげご)のうた」(『まど・みちお全詩集』、理論社、1992年)

童謡としても親しまれている「ぞうさん」や「やぎさんゆうびん」「ねんせいになったら」でよく知られる詩人、まど・みちお(1909~2014年)の「あいうえおのうた」と「がぎぐげごのうた」。

「あいうえおのうた」

あかい え あおい え あいうえお / かきの き かくから かきくけこ / ささの は ささやく さしすせそ / たたみを たたいて たちつてと / ない もの なになの なにぬねの…… (は行以下は割愛)

「がぎぐげごのうた」

がぎぐげ ごぎぐげ がまがえる / がごがごげごげご がぎぐげご / ぎじぎぜ ぞろぞろざりがにが / ざりざり ずるずる ぎじぎぜぞ / だぢづで だんこ おおだいこ / だんどこ でんどこ だぢづでど…… (ば行とぱ行は割愛)

★谷川俊太郎の『あいうえおのうた』(降矢なな絵、)

福音館書店、1999年)

「だじゃれ」をふんだんに駆使した『ことばあそびうた』(瀬川康男/絵、福音館書店、1973年)が人気の、詩人で絵本作家の谷川俊太郎(1931年生まれ)が書いた「あいうえおうた」。

「あいうえおうた」

あいうえおきろ／おえういあさだ／おおきな
あくび／あいうえお
かきくけこがに／こけくきかめに／けつとば
された／かきくけこ
さしすせそつと／そせすしさが／せんべい
ぬすむ／さしすせそ
たてつととかげ／とてつちたんぼ／ちよろり
とにげた／たちつと
なにぬねのうし／のねぬになけば／ねばねば
よだれ／なにぬねの……

(はひふへほ以下は割愛)

★長田弘の『あいうえお、だよ』(あべ弘士絵、
角川春樹事務所、2004年)

散文詩集『深呼吸の必要』(晶文社、1984年)
や「講談社の創作絵本シリーズ」の『森の絵本』
『空の絵本』『水の絵本』(荒井良二イラスト、
講談社、1999・2011・2019年)などの著書がある、
詩人で児童文学作家の長田弘(1939～
2015年)が書いた、季節感、色彩感あふれる
「あいうえお、だよ」。

「あいうえお、だよ」

あ は いいました。／ぼくは ふゆ になる。
／ほんとうに ふゆらしい ゆき つも
る ふゆになる。／／い は いいました。
／わたしは はる になる。／こぶし さく
ら らいらつく 花 (はな) さきこぼれる
はるになる。／／う が いいました。／わ
たしは あめ になる。／しつとりと やわら
かく みどりうるおす あめになる。／／え
が いいました。／ぼくは なつ になる。／ほ
んとうに なつらしい かんかんでりの なつ
になる。／／お は いいました。／わたしは

あき になる。／あおい空 (そら) と しろい
雲 (くも) と ゆうひのうつくしい あきにな
る。…… (以下は割愛。冒頭の26行は省略。
カッコ内は漢字の読み仮名である)

ところで、長田の散文詩集、『深呼吸の必要』
(晶文社、1984年)に、「ときには、木々の光を
浴びて、言葉を深呼吸することが必要だ。日々
のなにげないもの、さりげないもの、言葉でしか書
けないものとおして、思いがけない光景を、透
きとおった言葉にとらえた《絵のない絵本》。」と
いう一節がある。

『絵のない絵本』とは、デンマークの作家、ハ
ンス・クリスチャン・アンデルセンの連作短編集
(屋根裏部屋で暮らす貧しい画家が、夜ごとに
訪れる月の語るさまざまな話に慰められた、そ
の話を33夜の短編にまとめた)のことで、私が
小学生時代に読みふけた『世界少年少女文学
全集』(創元社、全50巻、1953-1956年)の中
に、アルフォンス・ドーデの『風車小屋だより』
などといっしょに収められていた。

長田が『深呼吸の必要』「あとがき」に、「言葉
を深呼吸する。あるいは、言葉で深呼吸する。そ
うした深呼吸の必要をおぼえたときに、立ちど
まって、黙って、必要なだけの言葉を書きとめた。
そうした深呼吸のための言葉が、この本の言葉
の一つ一つになった。」と書いているのは、たと
えば、アンデルセンの『絵のない絵本』に射しこ
む「月の光」から毎夜、その〈深い呼吸〉ととも
に届く、心ときめく物語を、「日々のにげない
もの、さりげないもの、言葉でしか書けないもの
を」散文詩として表現したのであろう。

子育て講座に参加する園児の母親たちが、日
本語の〈たまご〉としての「あいうえお」(ひら
がな)を通しておとなのなかの〈子どもの宇宙〉
に出会い、そして、「あいうえおうた」(ひらがな
詩)音読を体験することで〈ヒーリング・リーデ
ィング〉の境地に少しでも近づけるよう、たのし
くゆかいな講座運営を心がけたい。